

## 境界をなくす

北杜市立長坂中学校三年 片山 瑛太

僕は少し前まで、耳の聞こえない方は普通の人とは違うという考えや偏見を持っていた。だが、いざ接してみると、その考えは間違っていた。障がいを持っている彼と僕は、同じ人間。年齢や容姿は異なっているが、個性を持つ一人の人物だと考えられるようになった。僕は、障がいをもつ人と、それ以外の人の壁を無くしていきたい。

僕は今まで、身体に障がいを持っている人に対して、どこか下に見ていたり、かわいそう、何か自分達とは違う人だという感情・考えを持っていた。だが、耳の聞こえない人と関わる機会があり、彼と関わっていく中で僕の考えは180度変わった。

ある日、僕が社会人や学生たちで行う卓球の練習会に行った時のことだ。いつものメンバーの中に、見知らぬ人が交ざっていた。とりあえずあいさつをしたが、言葉一つも返ってこなかった。いやな感じだなと思いながらも練習に入った。休憩時間になり、指導者の方に誰なのかたずねました。すると、耳の聞こえない方だと紹介された。予想外の返答にとまどいながらも、練習するタイミングがまわってきた。どうコミュニケーションをとろうか悩んでいる時、彼は、ワンタッチで文字を消すことができる電子パネルを持ってきて、筆談を始めた。言葉だけではあるものの、考えていることは同じで、問題なくコミュニケーションをとることができた。この回以降も、彼は、卓球の練習に来るようになり、自然と打ち解けていくことができた。

彼が練習に来はじめて二ヶ月ほど経ったころ、どうしても聞きたいことを、聞いてみることにした。それは「耳が聞こえないことについて自分自身がどう思っているか」ということだ。少し失礼だし、聞かれたくないことだってあると思った。だが、自分との関係性や相手の様子を見ながら、思いきって聞いてみることにした。そうすると、快く応じてくれた。その内容を、ここで少し述べておく。

「僕も、昔は耳を聞こえない身体で産んだ母のことをうらみ、ひどいことを言ったりしてしまいました。ですが、今は産んでくれた母に感謝していますし、自らのことについて受け止めて、きちんと理解することができています。周りとは違うということにきづき、何をしたらいいか分からず、ただ自分を産んだ

母をにくんでいた時期に卓球と出会い、人との関わり、温かみにふれていくなかで私の心は満たされていきました。それからは、身体の障がいを持つ方々への一方的な考え方を無くすための活動をしています。身体に障がいを持っているけれど、周りの人と違う行動をとられるのは、誰であろうと辛いです。だから、少しでも境界線を無くすために、毎日ネットなどで呼びかけています。」と、僕に教えてくれた。僕は内心ドキッとした。身体に障がいがあるというだけで、自分たちとは違うと決めつけていた自分がいたからだ。この日から障がいを持つ方に対してのイメージや考えは一変した。

僕は、自分がした失礼な質問に対して真剣に答えてくださったことに、何かお礼をしたいと考えた。そこで思いついたのが手話だった。手話は文字通りに、手で形をつくり、その形を読みとり、会話するというコミュニケーション方法だ。そして、次の練習までに、「こんにちは」「ありがとうございます。」「練習しましょう」などの簡単な単語や、必要な言葉などを覚えていくことにした。

練習の日、彼を呼び止めて手話をすると、彼はとても喜んでくれた。それから一気に心の距離がちぢまったと思った。

最初は関わるつもりもなかったが、それは自分の勝手な思い込みで、障がい者に対して偏見を持ち、遠ざけていただけだった。後日、練習に参加していた学生たち全員で簡単な手話を一人一つ覚えてくるという約束をし、毎回それで話しかけるようにしている。この会話は今でもつづいていて、とても意味のあることだと考えている。遠まきに見るのではなく、同じ趣味をもつ仲間として彼と接したことで、僕の世界は変わった。手話や電子パネルを通しての会話は、本当に世界観を広げる体験となった。身近に障がいのある人と交流するなかで、もっと日本中に手話を広めていきたいと考え始めた。

日本中のほとんどの人は、障がいを持っている人に対して、下に見ているような風潮がある。そんな現状を少しでも変えていくために、今自分にできることを精一杯やっと思いこうと思う。健常者と障がい者を分けている無意識な壁が無くなり、お互いが気軽に交流できる場所が多くなることを願っている。